

## 匿名座談会「現場記者が見た小泉政治」

大手紙A…大手新聞社編集委員

大手紙B…大手新聞社社会部記者

NHK… NHK報道局記者

民放… 在京キー局政治部記者

司会… 岩崎 貞明（『放送レポート』編集長）

丸山 重威（関東学院大学教授）

### ▼「小泉ペース」のぶら下がり取材

岩崎

皆さんに、小泉首相の 5 年間を振り返って語って頂けたらと思います。報道の在り方、メディアの内側にいる人間としての思い、そのあたりを話していただけますか？

民放

最初のころのブームはすごかったですね。国民にも大きな期待感を抱かせましたし、我々も「今までの政治が変わるのか」という一種の期待を持っていました。「自民党をぶっ壊す」という小泉さんに「どうなるのかな？」という思いを持ちつつ取材をしていました。

この 5 年間を振り返ってみると、確かに壊したところはあるかもしれない。小泉さんと闘った橋本龍太郎さんが亡くなりましたが、その橋本派をぶっ壊したとは言えるかもしれません。かたや小泉さんの出身派閥である森派はどんどん大きくなって、最大派閥に膨れ上がってしまった。そういう意味では、自民党を本当に壊しきっていないし、「新しい自民党」を作れたか、というと作れていない。

小泉政権を総括するには、次の政権まで見てみないと分からないと思います。その時に揺り戻しが必ずあるわけですから、そこまで見ないと総括できないと思います。

大手紙A

政治手法的には確かに旧来の自民党政治を変えたんだな、と思いました。国内では郵政民営化に代表される構造改革をある程度やった。ただその結果、格差拡大という負の面がこのところクローズアップされてきています。外交面では、9. 11 以後の世界において、90 年代に用意された対米追随政策を実行段階に移していく役割を果たした。2001 年から、米国との距離をさらに縮めた 5 年間だったと思います。

小泉首相は訪米して、「世界の中の日米安保」を確認しあった。亡くなった橋本元首相

の日米安保再定義から、さらに少し変わったわけです。その一環として米軍再編が行われるのですが、お金の負担とか、「憲法を改定して海外でも一緒に自由に動けるようにしましょう」という話に本格的になるのは、これからです。アフガン～イラクはその助走だったのでしょう。

## NHK

私が小泉政治と最初に関わったのはハンセン病問題での控訴断念の場面です。これで「小泉政権は今までと違う」というイメージを強く持ち、それが大きな期待となった部分があります。当時は、最後には政府が控訴して被害者が救われない、と見ていましたが政治決断で控訴を断念して、しかも患者に会って握手までしたことが強烈な印象になりました。

取材現場で大きかったのは、スポーツ新聞などが取材し始めたことです。彼らが官邸のパスを手に入れるようなことは今までなかったことです。確かに戦略もあったかもしれませんが、それ自体はある意味いいことだと思います。

また、若い官僚たちもものすごい期待を持っていましたね。たとえば「プロジェクト K」なんて、霞ヶ関の 30 代の官僚が実名で本を書いている。かつてはそんなことをやれば疎まれて、役人としての将来がなくなっていたと思いますが、もうそうじゃない、という活性化した部分は確かにあると思います。

## 大手紙 B

ハンセン病での控訴断念が小泉首相の決断だというのは実は嘘で、法務省に知恵を授けて貰った、というのが社会部記者の間ではなかば常識です。そう書かなかった社会部も悪いが、単純に小泉首相に好感した政治部は単純すぎると思います。

## 丸山

スポーツ紙に関しては、飯島秘書官が最初に懇談会を仕掛けたのですね。

## 民放

メディア対策でいうと、小泉さんはテレビでは 1 日 1 回は必ずぶら下がりがありました。森総理までは、総理番記者は一挙手一投足ついてまわる。その間、質問は可能で、オンレコで記事にはできましたが、テレビニュースにはなりにくい。小泉さんになって、1 日 2 回ぶら下がりのうち、昼はオンレコだけで映像はなし、夕方はテレビも OK ということで、毎日会見しているような形になりました。そのぶら下がりて総理の考えを発信することができるようになったことが、まさに飯島さんの作戦でした。

ところが取材する側では、総理番というのは政治部のペーパーの記者が配属されるという図式が変わらない。右も左も分からないペーパーの記者は、総理への質問で「それはどういうことですか？」と畳みかけることもしない。質問も、実際には事前に秘書官と摺り

合わせている。そういう“出来レース”でやり取りを毎日繰り返してしまう結果になってしまった。メディアから「こういう事を質問します」という通告のもとにワンフレーズの答えが返ってくる。そういう意味では、政治を身近にしたという面では評価はできるかもしれませんが、1~2時間前には質問を通告してしまっているから、ワンフレーズのコメントを考えさせて、「小泉ペース」を定着させてしまった、という反省点はあります。

#### 大手紙B

社会部から見ていると、首相のぶら下がりには、本当にあほらしい質問しかしていない。だいたい、質問事項を官邸クラブの記者、もしくは政治部だけで考えることが無理でしょう。政治部は永田町と霞ヶ関のことしか知らないんだから。「今、首相に聞かなければならないテーマはこれだ」というものを社会部、経済部、その他各部から出し合って、総理番が質問するシステムなどを作らない限り、進歩しない。例えば「首相は米国に劣化ウラン弾の使用中止を求めないのか」といった厳しい質問を、もっとどしどしするべきです。二言目には「相手に食い込むために厳しいことは聞かない」と、もっともらしいことを言う記者がいるが、読者から頂戴した金で取材していることを忘れてはいけません。

#### 丸山

典型的だったのが今年の「郵政選挙」でしょう。議題設定が郵政民営化の是非に持っていかれた。メディアは「刺客対造反議員」として公平に取り上げ、泡沫候補もきちんと扱いますが、ほとんど意味がない。もともとの争点を郵政問題にしているわけだから。

#### 民放

私は小泉さんの直近 3 回の衆議院選挙・参議院選挙の選挙特番も担当しました。いちばん近い「郵政選挙」では、事前番組を含めて、各党、各候補をできるだけ同じ時間、均等に扱って公平性を保とう、とやっているんです。でも、論点設定が「郵政」だと、「郵政民営化に賛成なのか、反対なのか」しかなくなってくる。やっぱり刺客だの女性候補だのに注目を集めてしまって、民主党が浮いてしまう。もちろん自民党の広報戦略がうまかった面もあるし、その逆に民主党がうまくいかなかったという差もありますが、同じように紹介しても、その切り口がメディアとして面白いところにスポットを当てれば、あえてそうするつもりがなくても「民主党は面白くない」ということになってしまう。

## ▼旧来の取材手法が通用しなくなった

#### NHK

そこで疑問があるんです。小泉政権のマスコミ戦略を誰が考えているのか、ということ

が本当に分からないのですが？

民放

やはりいちばん大きいのは飯島秘書官の存在ですね。どこにそういうセンスがあるんだろう、と思ってしまうぐらいですけど、スポーツ紙やワイドショーにターゲットを持っていった。飯島さんは講演ではそう語っているそうです。

丸山

2001年の秋ごろですが、あるメディアの社内向けに飯島秘書官が講演した記録を読んだら、10年ぐらい前から「小泉を活かすターゲットは女性週刊誌とスポーツ紙だ」と言っていた。政治を決めているのはそういうものを読んでいる人たちで、他の人たちは何を言っても変わらないが、その人たちは「こっちを向いたりあっちを向いたり」する、と言っていました。

NHK

メディア戦略でやはりすごいと思ったのは、拉致問題の時です。拉致被害者家族は当初、日本政府に対する反発が強かった。それが頂点に達したのが、5人が帰国して幕引きされるんじゃないかという不安がピークになったときです。拉致家族の怒りが頂点に達したところへ小泉さんは来るわけですが、その会見の場に、最初はカメラを一切入れないと言っていたのが、急に「テレビカメラは最初から入っていい」ということになった。そこで小泉さんは家族らから罵倒を浴びるわけです。すると世論は拉致家族に対する反発を強めて、主客が逆転してしまう。拉致家族の怒りをきっかけに小泉政権は失墜していくのかと思いきや、逆に世論の支持を得ちゃうんです。世論の変化にわれわれマスコミもついていけないのに、そこまで読んでやっているとしたら本当に恐ろしい。

大手紙A

この前の総選挙での「解散する」という判断も通常だったら考えられないことでしょうね。勘がいいのか、計算なのか。解散時の記者会見で一気にしゃべったメッセージの出し方がよかったのですかね？

丸山

しかし小泉首相は、中川政調会長には1年前ぐらいから「絶対に（解散を）やるから誰にも言うな」と言っていたらしいね。

大手紙A

民主党の枝野幸男さんは、まだその数ヶ月前に会ったときに、「あの人は絶対やります

よ」と言っていた。その確信ぶりに驚いた記憶があります。

## NHK

これだけの新聞・テレビがそれなりに取材しているのに、誰に聞いても「小泉政権のこのバクチを『誰が』『どういう勝算があって』やったのか」ということを語れる人がいない。今までの政権は、大物記者がブレーンになっていたりして、「自自公でいきましょう」とか言って決まっていたのが、「誰が何を考えているのか」が見えないんです。

## 丸山

そういうことが、メディアの中で何か問題を起こしている要素はありますか？ 政界が機動力を持ってきて、メディアの側が対応しきれていないということはないですか？

## 大手紙B

新聞労連の美浦前委員長が個人のブログの中で「落としどころ報道」という言葉を使っているんですが、まさしく落としどころ報道の限界が露呈していると思う。自民党はこう主張している、民主党はこう反対している、結局、こういう結果になるでしょうという予測報道ですね。そこには、自民党、あるいは民主党の主張に対する批判は含まれていない。有権者をしらけさせているA級戦犯は、この落としどころ報道じゃないかな。

## NHK

森政権の末期からここ数年、閣僚人事については伝統的に強いと言われた NHK や大手紙が全然情報が取れない。飯島さんは赤坂プリンスホテルのポトマックというレストランでよく食事をしますが、その周辺に雑誌や民放の記者はいても、大手紙や NHK の記者はあまりいない。

## 岩崎

そうすると旧来の 55 年体制的な政治部の取材手法では、取材がうまくいかなくなっているんじゃないか、という自覚はありますか？

## 民放

かなりありますよ。あるから後手に回って、かえってますます小泉さんの術中にはまってしまう。日曜日に幹事長クラスがテレビ各局を回りますよね、フジから NHK、最後はテレビ朝日まで。10 年ぐらい前、その流れを新聞は批判したんです。「NHK までやるとは何事だ」と言っていたのが、小泉さんになってそういう批判はなくなった。逆にああいうところでの発言しか取材できなくなって、あれを否定しちゃうと情報がない、というのが本音じゃないかと思います。

大手紙A

10年前くらい前からでしょうか、新聞の政治部記者が「日曜の朝にテレビスタジオに行って全部を聞くのが俺らの仕事なんだ」と半ば自嘲気味に言ってました。だけど、ある意味では透明化されて、国民にはいいことかもしれません。

丸山

逆に、「アドバルーン」も多いんじゃないかな。

大手紙A

また、議題設定の難しさもある。いまや自嘲も言わなくなった。つまり大手新聞の敗北、今までの政界取材の限界かな。

NHK

渡辺恒雄さんの夜の懇談会に福田康夫さんが行かなかった、と報道されました。政治家が旧来の大物記者などを相手にしないようになっている。確実に変わってきていますね。

大手紙A

変化が始まったのは、90年代に入ってから、55年体制が崩れたところだと思います。その頃、政治部の記者はよく嘆いていました。「今までは大物に食い込んでいけば人事から政策まで全部分かったが、もうそれが通用しなくなった。つまり意志決定がばらけて、面的になってしまった。1点食い込み型ではだめで、全部拾っていかないといけない」と言っていた。その頃からテレビ政治的な世界になって、それがさらに純化されていますね。

大手紙B

共謀罪創設法案が「平成の治安維持法」と呼ばれ、捜査関係者からも批判が出ていることは既に毎日新聞や東京新聞の報道などでも明らかだった。にもかかわらず、政治部の報道は決して法案を批判しようとしなくて、「与野党のかけひき」に矮小化してしまう。「小沢民主党は、国民に不評の共謀罪の審議を参院選まで引っ張りたがっている」なんていう低俗な政局記事もあった。

民主党が表面上、対案を提出しながら、水面下では社民、共産とタッグを組んで、なんとかこの悪法を廃案にしようと時間稼ぎしていたことは、ちょっと取材すればすぐ分かることです。なのに、何でああいう報道がなされるのか。日本の政治報道は思考停止してるとしか思えない。政治家より時代遅れな頭になってるんじゃないでしょうか。

NHK

省庁の事務次官クラスに「小泉さんってどういう人ですか？」と聞いてみると「彼は政策に関心はないし、ただ天性の鋭さを持っているぐらいかな？」という言い方になる。それは否定的な言い方ですけど、「天性」で片づけられないくらい対応できていない。

丸山

僕は、どっかに黒幕がいるはずだ、と考える質だけど、「どうやら政治というのはそうじゃないかもしれない」と思うようになった。機動力になっているのは飯島さんとかでしょうが、彼が全部、政治の流れの絵を描いているかというところとそうじゃないと思う。それぞれ個別のところがある一定の意思を持って動いて、それが少し食い違ったり重なったりしながらモザイクで動いていく。そういう図式があるような気がします。ファシズムってそういうふう動くかな、と思う部分があるので、恐いな、と思う。

民放

飯島さんは小泉さんの活かし方を考えて、いろいろアイデアを出してはいます。じゃあ飯島さんの知恵だけで動いているかというところとそうじゃなくて、「役者・小泉純一郎」というのが上手いんですよ。とりたてて政策を知っているわけではないが、政策の肝は押さえている。手法はワンパターンですけども。まず敵を作る。抵抗勢力もそうだし、中国・北朝鮮もそうだし、そういう図式を作って、そこに問題を単一化してしまう。

靖国の問題でも「外国のいいなりになるのはおかしい」という強い事を言うと、反論しにくい。靖国反対派の人からいえば本当に乱暴な論理だと思っているんだけど、的確なことをなかなか言い返せない。小泉さんの言い方は、「外国に言われている」ということに一本化しすぎて、他のことを目くらましにしている。

丸山

そして最後には「私の心の中の問題だ」となってしまう。それなら「他人の心の中も気を付ける」と言いたい（笑い）。

民放

問題を単純化させてしまうことの上手な人です。そのためにもっと他の大事なことを考えないといけないのに、みんな目くらましされてしまっている。

岩崎

郵政民営化のように国内問題だったら敵を作っても最終的には勝ち負けをはっきりさせられると思いますが、外交は相手がある問題なので、こちらの都合で突き進んでも、極端に言えば国交断絶みたいな破局に向かう可能性もある。その辺は、落とすところを考えたうえでどのような態度を取っているのか。それともただやりたいようにやっているのか。

民放

着地まで考えていたら 5 年のうちにやり遂げて去っていくでしょう。外交には通用しない手法ですね。後の人には、かなり負担として残るものになってしまっている。

靖国問題は、小泉さんは聞かれたから、かねてからの持論を言っただけに過ぎない。安倍さんは広い意味で「アジア外交は大事だ」と言ってますが、靖国を争点化しないでうやむやにしたい、と心の中では思っている。それは、幅広い支持を得るため、安倍さんも割とフレキシブルな人ですから、小泉さんのような口約束はしないでいこうという作戦ですけれども、総裁選ではどうしても争点化しますよね。

岩崎

一国会議員の時に安倍さんは靖国に行っていて、小泉さんはヒラの議員時代には靖国にはほとんど行っていないと思います。総理になるときの公約として靖国参拝を言い出す。そして総裁選に当選した。彼はもともとそういう信念がある政治家じゃないのに、そこまでこだわるのは何なのでしょう？

民放

5 年前の時点で言えば、票が欲しかったのだと思います。

丸山

彼は、自民党内の右派の勢力に足場がないと思う。森派の中でも基盤はなかった。9. 11 も、最初は「何か気の毒なことだった」という程度の発言だったのに、数時間でバツと変わってしまう。それはアメリカから「何かやってくれ」と言われたからでしょう。そういう意味では自分で判断できる人ではないような気がする。

NHK

靖国の件は確かに信念じゃないと思います。靖国の公式参拝的なことを言いつつ国立戦没者御苑のようなものも否定しない。「千鳥が淵を国立戦没者御苑にする」と言い出したら、それは「靖国と政治を切り離す」ということで、両立するはずがないのです。信念じゃなくて、風を読んでいるところがあると思います。

民放

郵政民営化は信念というよりは執念ですかね。橋本派に対する恨みみたいなものもすごく感じましたが、法案が通ってしまうと無関心ですし、やってしまうと飽きちゃう人なのかと見えています。



大手紙A

不良債権処理問題は、一応やったというポイントだと見られていますか？

民放

あれは竹中平蔵さんがやったということになっています。総理は竹中さんの言ったことを全部追認しているだけで、総理が何か言ったというのはない。竹中さんが自民党の中から批判を浴びた時、小泉さんは「それで行け！」と言ってはいますが。

## ▼ “無風状態” を好むNHK

丸山

この5年間の間にメディアがどこか変わった、と思います。メディアがもっと声を出していいところでもうまく言えなかった、というところがあると思いますが、どうですか？

民放

就任直後から「ワイドショー政治」と言われていましたね。確かにテレビメディアで扱う政治ニュースの量はかなり増えた。その取り上げられ方には、最初は期待もありました。どろどろした自民党政治を変えてくれるんじゃないか、というイメージがありました。公共事業の拡大には反対だ、特殊法人も整理統合していくんだ、とどんどん取り上げて、それに反対する人は抵抗勢力として「かっこいい小泉さん対ちょっと強面の抵抗勢力」という図式でした。

丸山

ワイドショーで政治ネタが増えたって言われたけど、実際には向こうからネタが投げられてくるという関係なんですか？ それともこちら側からアプローチしていくのですか？

民放

総裁選当時は永田町全体が劇場でしたら、番組のニーズも永田町になっていました。田中真紀子さんも出ましたし、グッズやでかいポスターも出たし、社会現象として取り上げないわけにはいきませんから、僕らも劇場に踊らされて報道してしまったと思います。

丸山

そういう時、テレビ局の中で反省や批判が出てきて、違う番組づくりができないものでしょうか？ もっと違う形の『TVタックル』みたいなものができるか、と思うんですけど、そういう問題提起は内部からは無理なんですか？

民放

無理なことはないと思います。就任当時から違和感はあって、5年も続いてくると違和感もどんどん大きくなってきました。最初の永田町ワイド劇場みたいなショック以降、政策を扱わなくなった。郵政問題も、中身というより反対派と賛成派の激突、喧嘩でしかない。「今、喧嘩なんて永田町でしか見られないよ」という感じで面白可笑しく報道してきました。

丸山

良心的な番組が頑張ってはいますね。『NNNドキュメント 06』で生活保護の問題を取り上げていましたが、それは今の弱者切り捨ての政治と関連があります。『サンデープロジェクト』でも共謀罪を追った番組がありました。ああいうのはやりにくいのですか？

民放

やりにくいことはないです。『サンデープロジェクト』みたいな足場が、うちの局でもあればできると思います。視聴率を気にしながら番組をやっていると、あまりにも分かりやすい小泉劇場一色で麻痺しちゃったんだと思います。見る方もたぶん麻痺していて、たまに真面目なことをやってもあまり反応がない。悪いスパイラルになってます。こちらは真面目なこともやりたくてしょうがないのに、視聴率が取れないからできない。

丸山

NHKでも視聴率は気にするんですか？

NHK

今はかなり気にしていますね。この項目でど一んと視聴率が下がったなどということは分かります。だからどうなる、ということはありませんが、無言の圧力はありますね。今の話でいうと、新たな番組ができるかできないかではなくて、既存の番組枠で何をやるか、という判断にはかなり影響してきます。

丸山

NHKは一方では最近いい番組を出てきている、と言われてますよ。

NHK

これまでNHKは、当局がお墨付きを与えたものを出してきた、と思います。NHK独自で取材した調査報道では、政府の随意契約の問題をやりました。これは放送もできて、それなりの反応もあり、政府の対応も変わった。すると「自分たちの会社はどうなんだ？」というのは常につきまとう問題です。それでNHKの随意契約が国会などで問題になった

ときに、終止符が打たれる。「メインでやっていた記者を東京から出し、取材班を解散させました。転勤先が大阪だという話ですから昔ほど露骨じゃありませんが、まだ変わっていないと思います。問題を提起し続けるというあるべき姿にはなっていないのです。今は、**NHK** 全体がどうなるか分からない。軸足を置いて職員が働ける状況じゃなくて、経営側の意向に逆らえないところが出てきていますね。

番組自体はいいものも出てきていると思うけど、その反面、みなかなり戦々恐々としている。海老沢会長が辞めて、新しい会長が就任してしばらくは「プラハの春」と言っていたんです（笑い）。やっと我々も自由になったけど「プラハの春」はいつか終わりが来るのがまた怖い。それが政治の圧力なのか、視聴者の反発なのか。露骨な政治の介入というのはあり得ないと思いますが、視聴者の反発の可能性はありますよね。

丸山

番組改変を内部告発した長井チーフプロデューサーたちの配転問題は、現場ではどのように受け取られているのですか。

**NHK**

あの問題は非常に複雑です。戦犯法廷の番組が問題になっているとは聞いていたけど、担当のチーフプロデューサーがいきなり記者会見してしまったのは我々も驚きました。他にやりようがあったんじゃないかと思う人は多いです。だから、みんなどちら側にも組し得ない。今回の配置転換に意味がないとは言えないと思っていますが、彼らを守るために動くかという、そこまではない。あの問題に関する思い入れはないんです。本音では、片が付いたと思いたいのです。

それよりも、「**NHK** って大丈夫なの？」という声が出ている。新聞で **NHK** の問題が常に語られているという、かつてない状況ですよ。それが逆に長井さんたちに対するシンパシーを麻痺させています。会社がどうなるか分からない、という不安は強い。

岩崎

海老沢会長時代は強力なトップがあって、みんなそこへ向いて仕事をしていた。今はそういう存在は **NHK** の中にはいない。けど「いつ来るか分からない」という不安を感じながらやっているという状況だと思います。その場合、今回の配置転換を含めて「誰が」「どういう判断をしているのか」という問題はどうなっているんですか？

**NHK**

**NHK** は、職員も経営者も“無風状態”を好むんです。長井さんのケースも、彼らに能力があるかないかという問題じゃなくて、ただ遠ざけたいのです。政府の不正を追及するという場合には政治的な圧力が必ずあると思いますが、今はそういうことで波風たてようと

はしない。腹八分ぐらいでおさえようという意向が働いてくる。誰が言い出すわけでもなく、なんとなく「そこまでいいんじゃないか」という感じになってくるのです。

丸山

NHK に対する期待というのは、いい番組を作るというのもあるけれど、ニュースの中である種の公正さを期待されていると思います。そういう期待がようやく視聴者の中から噴出してきた状態だと思います。日放労もその気になれば支持はついてくると思う。「NHK はこういうふうには再建していこう」「政治家がそんなことをやったらおかしい」と言えば、みんな支持すると思うのですが。

NHK

僕らもそう思って支えてきたんですけど、NHK の組織自体がガタガタしてきてリストラを組合が認める状況です。日放労の立場から言うと、世論の支持も得たいけれど、実際に頭を悩ましているのは、リストラをどれぐらいで抑えるのか、という純粋に労働組合的なもので、とても外部に向けてアピールするところまでいかない。悪循環に陥っていて、誰か声を出さなくてはいけない、とみんな思っているけど、そうはならないのです。

岩崎

NHK はサッカーワールドカップの取り上げ方がすごかったですね。自分のチャンネルで中継するというのが要因としてあるのでしょうか、ニュースでまであんなに詳しくやる必要があったのでしょうか。

NHK

お金をかけた以上はやめられないのがテレビ局の宿命で、その点では NHK も民放と判断基準としては変わらないですね。ニュースの項目でも、やはり数字が取れるものとなる。

## ▼「米軍再編報道」の落差

丸山

この 10 年～15 年、新聞印刷の別会社化が進み、合理化は次の段階に進んでいる。成果主義賃金が徹底されている。その中でいろんなトラブルが起こってきていますか？

大手紙 A

構造改革的なものが、新聞社の中に浸潤していますね。新聞社は電産型が稀有に発達した賃金体系だったのですが、90 年代から崩れていく。組合もそれを認めていって、ほぼすべての新聞社が成果主義・実績主義賃金を導入しました。毎日新聞はまだ頑張っているよ

うですが、地方紙も琉球新報が入ってないぐらいですね。アウトソーシングが編集まで進んできた。印刷部門の別会社化の次に、制作という入力・組版部門の別会社化に来て、そしてここ数年は、編集での一部別会社化が始まっている。校閲の場合もあるし、編集庶務を派遣社員に切り替えていく場合もあります。

岩崎

テレビの中でも、かつて正社員がやっていた仕事を正社員じゃない人がやっています。

大手紙A

中国新聞社では、別会社の記者が取材した記事の配信を受ける形にしていると聞いています。

民放

現場の取材記者は正社員ですが、番組の取材ディレクターは現場では入り交じっています。政治部系の記者は通行証の発行などあるのでまだ正社員の聖域なんですけど、社会部系では外部の取材記者がディレクターとして入ってきます。現場に取材ディレクターが各番組から行くようでしたら、正社員ではない別会社の人の方が多いでしょう。

丸山

それが新聞に来たってことですか？

大手紙A

そうですね。もともと雑誌では正社員型とプロダクション型が混在していました。社員アンカーがまとめる形もあった。NHKもプロダクションを使っていますね？

NHK

ものによります。報道はないですけど、放送の送出職場などは社員ではないですね。

民放

下請けは、会社側からすると「安くできる」というのがある。優秀でないわけでもない。むしろ今、「作りたい」という人はプロダクションに行く。管理業務が膨らんできて、「テレビ局は面白くない」という人も出てきている。

大手紙A

小泉改革にひきつけて言えば、外注化・下請化という構造ができあがってしまった。流動化はいいけど、縦の流動化で「易きに流れる」のが問題です。横の流動化になっていな

い。

丸山

新聞は構造不況業種だから 5300 万部から上に行かない。生き残り戦略になってくるわけです。成果主義賃金の導入もそうで、部長賞とかデスク賞をやたらに作らないと成果が見えなくなっている。そのことが誤報を起こしたりすることに繋がっていないでしょうか？

大手紙A

若手の記者が、自分がどう評価されるのか気にするようになった。世の中の新自由主義の洗礼を浴びた中から当然、記者もリクルートされているわけだし、世の中全体がそう向いているからかもしれません。

NHK

NHKは地方からスタートして、半分ぐらいしか東京に上がれない。「どうやったら東京に上がれるんですか？」と一年生の記者が平然と聞いてくる。まさに「どう評価されるか？」に対する反応です。それだけ競争が激しくなっている証拠でしょうけど、あまりそんなこと考えてもしょうがないと思うのですが…。

岩崎

ローカルの記者は、その地場のメディアしかありませんが、全国紙と NHK は「いつかは東京へ」と思う人たちが仕事をしている。地元の人からすると、そういう記者とは信頼関係が築けない。伝える側からすれば、地方の問題でも東京の視線で考えている。そういう傾向はないでしょうか？

NHK

東京の視点を入れないと駄目なんです。その人が地域に根ざして報道をしても、全国ニュースにならないと評価されない。

岩崎

米軍再編についても、沖縄県民から見た政府の決定はものすごく問題があるはずですが、NHK の沖縄放送局では、東京発とは違う視点で米軍再編問題をとらえるべきだと思いますが、ローカル局のニュース価値判断でどのくらいの自由度が許されているのでしょうか？

NHK

ローカルニュースにおいては地元の価値判断です。ただ全国に発信するとき、その価

値判断を引きずった番組やニュースはありえない。同じ言語で基地問題を語ってこなかったという事もある。「それは沖縄の身勝手さだろ」という東京の判断が常に軸になってしまいますよね。だからこの前のNHKスペシャルで沖縄の基地問題をやった後、沖縄の友人から電話がかかってきて「ひどい番組だな」と言われました。基地を是認する番組になってしまったのです。

丸山

新聞も、大手紙がだらしない。たとえば岩国の住民投票の時に「説得しろ」と社説で書いている。あれは政府が住民に納得できる説明をしないから駄目だ、というのが事実なのに、それが逆になっている。ある地方紙は「(米軍基地は)日本から出ていってもらうしかない」と書いていましたが、僕はその方が正統だと思う。

民放

米軍再編については夜の報道番組では扱っていましたが、朝のワイドショーや夕方のニュース番組では大きくやらないですね。報道において政策面が軽んじられている事と繋がります。「扱わない」ことがすごく気になりました。

## ▼憲法こそが「国民の武器」だ

NHK

新聞では記者教育というのは、どうされていますか？ 日本のメディアは、目立つことをやった人が処遇もされてきていますが、一方で病に陥ったり、場合によってはあの大津放送局記者のように放火することになる。本当に記者教育によって地域でも頑張ってもらえるということを教えられるのでしょうか？ そうじゃないと目立つところに行きたい人ばかりになる。

大手紙A

朝日では二ヶ月間、新人教育を行っていると聞きます。昔はどこも新入社員を集めて3~4日、合宿を入れても4~5日、座学で偉い人の話を聞いて、あとは支局に散らせて「そっちで教えてくれ」というオンザジョブトレーニング(OJT)方式でした。その後、入社時、半年後、一年後と、研修回数を増やしてきました。いまは、内容的には中堅のチューターが教官になって、いっしょに街に出て実地に取材して書くようなことも研修としてやっているようです。

丸山

共同通信は昔から、研修を入社1年目から3年目までやっています。最初に2~3週間

やって、5月の連休前に地方に散らす。90年代から半年研修、1年研修が始まった。効果と言えば、同期会ができることですが、これは大事なことだと思います。共同の場合は支局の人数が少ないので教育する人間がいないのです。

#### 大手紙A

うちの社も県庁所在地の総局は、人手不足でひーひー言っています。一県内で記者13～14人が平均かな。それで毎日、2面作っています。

#### NHK

僕らのころも研修はやっていましたが、テレビカメラはこうやって回す、テレビ局はこんな所だという技術的なことばかりで、「ジャーナリストとは」とか「取材対象に真摯に向き合しましょう」ということを教えることはやっていません。

#### 大手紙B

今、新聞もテレビも、批判すべき事柄を淡々と書きすぎているように思えてならない。これは、よく言われるように、若い記者たちがチキン（臆病者）になっていることも一因でしょうが、一つには、憲法をちゃんと勉強していないから、拳を振り上げていいのかどうか判断できないという「無知」も、相当響いているように思えます。

法律、特に憲法をちゃんと勉強しておけば、立法府、司法府、行政府の様々な行動について、批判すべき基準が、自分の頭の中で非常にクリアになるんです。理論的裏付けがあるから、当局者に個別取材したり、記者会見に出たりしたときの「攻め方」も良くなるし、自信を持って批判できる。

なぜ、憲法かというと、憲法は権力者の横暴から国民を守るものだからです。いわば、権力者からの抑圧、いじめを受けた時、受けそうな時の「国民の武器、最後の砦」ですよ。その憲法に照らして物事を考える癖をつけておけば、「これは批判記事を書かなきゃいかん」という判断をするときの確固たる基準が、自分の中に芽生えるからです。

#### 大手紙A

最近、精神に変調をきたす人間が増えています。精神の変調は労務管理と関係があり、競争激化とも関係すると思います。

#### 岩崎

新聞はもともと構造的に長時間労働ですよ。

#### 大手紙A

それでも昔は、途中はだらだらする時間もあって、けっこうお酒も飲めたんですよ（笑）



い)。労働強化であまりそういうこともできなくなりましたね。

#### NHK

入ってくる新人も変わった。妙に真面目な人が多いのです。賢いから自分の先を見ようとする。「こうしたら東京にあがれる」というのは僕らの世代には想像もできない発想です。頭がいいから歩留まりも分かっている。エリートになってしまって、東京にいないとエリートじゃないような感じになってしまった。その構造が問題ですね。

僕らの頃までは「3K 職場だ」と自嘲気味に言ってましたが、今はそういう意識を持っては入社しない。メディアスクラム的なことをやるから 3K になるんだけど、そういう問題などを若い学生は知っていて「それはやらない方がいい」という知識はすごいから、「汚い」職場ではなくなって、現実にはきれいな職場になっています。

#### 大手紙A

でも、夜回り・朝回りとか、仕事が「きつい」のは変わっていないのでは？

#### NHK

変わっていないけど、やらなきゃダメだという意識は薄れている。「一年生に有無を言わさずにやらせるのは無理だ」と言っています。目的意識を持たせて、理論づけをしないと、こちらが身の危険を感じる（笑い）。

#### 大手紙A

従来やり方では、不合理なところがあったのも事実です。だけど現場に行ってみて初めて分かることもある。

#### 大手紙B

最近、30代前半の記者と話していて啞然としたんですが「日弁連って共産党でしょ」って言うんですよ。日弁連執行部は共謀罪や個人情報保護法、人権擁護法案などをめぐり次々にリベラルな方針を打ち出しているが、私の実感としては、基本的に民主党と歩調を合わせつつ、ものによって社民党や共産党とも、という感じです。自民、公明のリベラル派議員とも縁が深いし。なのに、まるで「2ちゃんねらー」みたいなことを真顔で言う。そんなにできの悪くない記者の発言だけに驚きました。

仮に「日弁連は共産党に近い」という事実があったとしても、こちらが日弁連への対応を変えるのでしょうか。新聞記者というのは、取材相手にレッテル張りするのが本当に好きな人種です。たびたび行政訴訟を起こす人のことを「訴訟マニア」と言ってみたり、某雑誌に原稿を書いた人には「創価学会寄り」とレッテルを貼ってみたり。一人の人物が自民から共産まで、さまざまな勢力とつかず離れずの距離を保って目的を達成しようとする

場合もある、ということが理解できていないんですね。そういう柔構造の市民運動などが増えてきているのに、新聞記者の頭の中はいまだに55年体制なんじゃないか。

## NHK

オーマイニュース日本版が8月から始まりましたが、あれが成功するかどうかはあります。正社員ではなく市民記者が出てくる。ソフトバンクがバックアップするからそれなりに日本でも出てくるでしょうが、既存のメディアはどうするのか、という気がします。

## 丸山

市民記者が書く技術を身につけるには、かなり時間がかかると思うけど。今でも内部告発で分かることがいっぱいありますが、それだけでは記事として不備なものが多い。それを「これじゃ出せない。ちゃんと調べろ」と、どれだけ丁寧にやれるでしょうか。

オーマイニュースが本当に「ニュース」になるためには、今の政治の動きをどうやってフォローするかだと思う。韓国のオーマイニュースは、ノムヒョン大統領は記者クラブを止めると宣言し、就任直後に大統領官邸でオーマイニュースと最初に会見しました。

## 岩崎

韓国はネット社会や市民運動の素地があって、その土壌にオーマイニュースが乗った。日本の場合、その土壌がないですね。

## 大手紙B

旧来型のジャーナリズムでは、だめなことが、ますますはつきりしてきたと思います。旧来型というのは、入社し、地方支局に配属されると、取る物も取りあえずサツ回りをやらされる。文学部や経済学部、理系出身の記者でもお構いなしに、刑法や刑事訴訟法のレクチャーひとつ受けさせないまま、「とにかくサツ官（警察官）に食い込め」とOJTの嵐に突っ込んで行く。それで、刑法や刑事訴訟法に長けた（若手記者を丸め込む論法に長けたという意味ですが）ベテラン警察官や検事に夜回りする。で、当局に都合よいネタを小出しにされて、喜んで特ダネとして記事化する。

こうして支局を二つ、三つ経験して、東京や大阪の本社に人事異動する。人にもよるけれど、そのころには30～35歳くらいになってしまっています。この間、まじめな記者ほど、勉強する時間なんてない。なにしろ、警察を担当しようが、県庁を担当しようが、夜回り・朝回りの連続です。たまの休日はぐったりして読書どころじゃない。世間の大半の人が勉強に勉強を重ねている年代を、新聞記者はOJTだけで過ごしてしまうんです。

## 大手紙A

小泉さんがまもなくいなくなる。小沢さんも出てきて政治は流動的でしょ。ブッシュも

あと 2 年ほど。経済の格差などをどうするか、などの議題設定は我々が意識的にやらないといけないのかな、と思っています。

それに年金問題や税金の逆進性の問題がありますね。住民税と所得税を合わせて 50%で頭打ちでしょう？ 昔は 75%まであった。そこに逆進的な消費税がさらにアップされる。しかし、少子高齢化が進む中で米軍再編の「負担」はどうするの？という問題も出てきますね。

## 民放

小泉さんのような強力なリーダーシップを持った人が税の問題でも年金の問題でも、もろもろの問題をピシッと決めて辞めればよかったでしょうけど、決めないでいなくなってしまう。次は安倍さんなんでしょうけど、小泉さんのマネはできない。

しかし、自民党にしても民主党にしてもどんどんポピュリズムが深化している。この前の国会なんて 3 分の 2 は与党が持っていたんで、どんな法律でも通そうと思えば通せた。医療改革ぐらいまでは勢いで行けたけど、共謀罪や教育基本法もマスコミが騒ぐと止めてしまう。自民党の組織を壊してしまったものだから、メディアが反対したものは押し切らない。メディアも責任をもって報道しないといけない。重箱の隅をつつくのもどうなのか、と思ってしまう。テレビも反対なものは反対と言ってしまうけど、結果もある程度考えながら報道していかないといいない。消費税増税反対とか年金も改悪反対と言って財政破綻を招いても「マスコミのせいだろう」と言われてしまう。

自民党はテレビの内容を全部チェックして、共謀罪の時は「あの番組はこういう報道をしている」と呼び出しを受ける社もあった。コメンテーターの発言をテープ起こししているのです。選挙が近づくともっとすごい。「刺客」という言葉でもマイナスイメージだとチェックされた。そういうことまでする政党になってきた、ということが小泉政権の特徴ですね。これからが本当のメディアの力が問われる時代になってくる。こちらも足腰据えて報じていかないといいないと思います。

## 大手紙B

メディアの責任を感じながら仕事しろという考え方には同感です。ただ、私は、全く逆の意味に考えている。野党精神と言ってもいいが、野党を応援するスタンスと誤解されるので「メディア＝ウォッチドッグ」論とでもしておきましょうか。つまり、私たちは自民政権の時は自民党を、民主党政権の時は民主党に噛みつく「番犬」だと。それは、読者からカネで雇われた番犬という意味です。読者も視聴者も、自分で政府与党をチェックする暇はないから、新聞購読費という形で我々に資金提供して、チェックさせている。だから、少しでも変なことを発見したら、ご主人様、つまり読者に知らせるため、ワンワンと吠える義務がある。

政治部の幹部から「社会部は政府与党批判ばかりしてるじゃないか」って、本気で文句

言われたという知人がいます。でも、当たり前だろう、それが新聞の仕事だろうって思います。1面、政治面で、毎朝、毎夕、あれだけ政府与党の“大本営発表”を掲載してるんだから、せめて社会面でバランスとらなきゃ、いかんでしょ。

## NHK

意味のある、「本当なんだ」ということを伝えていくべきだと思います。小泉政権で壊されて見えてきたものがある。そのものを伝えていけば、新聞も NHK も民放も支持は得られると思う。自分たちがやっていることをさらすことが大切です。

## 大手紙B

その「支持を得られる」ということですが、読者・視聴者の支持を得られそうになれば、正しいと思ったことでも報道しないのか。実は、そこが問われているのではないかと、とも思います。

## 岩崎

たいへんお忙しいところ、ありがとうございました。